

夏期海外語学研修報告

海外語学研修アラビア語 (フルサ・サイードプログラムモロッココース) を終えて

北アフリカ研究センター／人文社会系
岩崎 真紀

2015年7月2日から8月10日にかけて、海外語学研修アラビア語／フルサ・サイードプログラム（FSP）モロッココースを実施した。北アフリカ研究センターが主催するこのプログラムは2008年から毎年続けられてきたが、2015年度より CEGLOC 開設科目「海外語学研修アラビア語」として認定された。2011年に「アラビア語基礎」が開設されて以来、CEGLOC 浜名恵美センター長や関係教職員の方々のご尽力により、本学でのアラビア語学修環境は順調に拡充している。

本年は、比較文化学類、社会学類、教育学類、国際総合学類から6名の学類生が研修に参加した。彼らは、7月3日に20時間以上をかけてモロッコの首都ラバトの空港に到着し、出迎えには、北アフリカ研究センター客員共同研究員兼チュニスオフィスアドバイザー教員の Moncef Harrabi チュニジア国立農業研究所（INAT）元所長がチュニジアから駆けつけ、車で3時間かかるイフレンまで同行した。



AUI での研修を終え、タンジェに発つ直前の FSP 生たちと AUI 側コーディネータのブーナジュマ教授、2015/7/25（写真はすべて筆者撮影）

運営責任者である筆者が研修先であるアル＝アハワイン大学（AUI）を訪問したのは、プログラム開始後約20日経った最終試験の日だった。イスタンブールを経由し、カサブランカ空港に到着したのは、予定を2－3時間過ぎた頃で、成田を出てからほぼ24時間後だった。そこから3時間以上かけてイフレンに到着したとき



モロッコ地図（イフレンはフェズの南、セフルーとアズルーのあいだの後者よりに位置）。出典：
http://www.kaze-travel.co.jp/morocco_tenjo014.html, 2015/8/11閲覧。



カサブランカのハサンⅡ世モスク。アラベスク模様と緑とベージュを基調とした色使いが大変美しいモロッコ最大のモスク。市民の憩いの場でもある。2015/7/30

には疲労感を否めなかったが、生き生きとした様子の参加生たちと会ったときには、大きな充実感を得た。彼らの姿からは、この1か月がいかに実り多いものだったかが十分に伝わってきた。

密度の高い授業やマラケシュなど遠隔地へのエクスカージョンも含むさまざまなアクティビティからなる研修の様子は、北アフリカ研究センターホームページ (<https://arenatsukuba.wordpress.com/>) に掲載された高倉駿さん(比較文化学類3年)や草山亮さん(国際学類1年)、嶋村安祐美さん(教育学類4年)による現地レポートに詳しく描かれている。参加生はみなとても楽しんでいて。課外活動でスポーツも堪能できたことは、岩佐直斗さん(社会学類3年)からのレポートからもよく分かる。7月25日から8月3日まではタンジェでのホームステイとニューイングランド大学でのアラビア語研修だったが、

これは、AUIが筑波大生のために特別に設けてくれた追加プログラムだった。プログラム生がこの期間にも思い出深い経験ができたことは、岡元侑希さん(社会学類3年)や島倉遼さん(国際学類1年)からの現地レポートよく分かる。

面積が日本の約1.2倍あるモロッコには、イフレンやタンジェ以外にも、フェズ、マラケシュ、カサブランカ、アガディール、ワルザザートといったそれぞれに風合いの異なる都市がたくさんある一方、小さな村々も魅力的だ。地中海や大西洋を望む海岸沿いの街、4000m級の山を望む街、遠く沙漠が広がる街、地形や風景の多様さは、他の多くの中東・北アフリカにはない特色である。また、モロッコでは、伝統工芸の技術が大切に守られており、絵皿やアクセサリーなどの図像のセンスは日本のそれと重なるところも多い。

今回モロッコでの生活を体験した6名の筑波大生たちは、現地のリアリティを実際に肌で感じる事ができただろう。この経験は彼らの中東・北アフリカ観を大きく変えるだけでなく、彼らが自分の経験を友人や家族や先生方に話していくことで、その人たちの理解も変えていくことになるはずである。そして、それは、とても小さな草の根の変化かもしれないが、偏見のない異文化理解や、さらにいえば、世界平和



モロッコの京都といわれる古都フェズの皮革染色場。2015/7/25

に通じる着実な一歩であると確信している。

本プログラムでは、AUI 関係者の皆様、ホームステイ先の皆様、駐日モロッコ大使はじめ館員の皆様には本当にお世話になりました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

We really appreciate our Moroccan friends who supported Fursa Saida Program, especially, Faculty members of AUI, President Driss Ouauicha, Prof. Mohamed Bounajma and professors of ARANAS, Ms. Amy Fishburn, Ms. Khadija Ben Mansour and Mr. Othmane Atif, AUI, Prof. Moncef Harrabi, ex-INAT Director, Tunisia, Ms. Fathiya, Mr. Mustafa and all the members of the host family in Tangier, H.E. Dr. Samir Arrour and Dr. Abdel Kader Jamoussi, the Embassy of Morocco in Japan. Thank you so much for your great caring for our students to make their staying so fruitful. Their great experience will lead a right understanding of the culture and people in Morocco and MENA region and we are sure it will also lead a world peace even though this step is just a small one.

Maki Iwasaki

Fursa Saida Program Morocco Course Coordinator

Assistant Professor

ARENA / Faculty of Graduate School of Humanities and Social Sciences

University of Tsukuba

バイロイト大学夏期ドイツ語研修について

今年度のバイロイト大学夏期ドイツ語研修は、8月3日から21日までの日程で実施された。

7名の学生が参加し、全員が無事帰国した。

8月の一般コースは、IIK Bayreuth (Institut für Internationale Kommunikation und Auswärtige Kulturarbeit) の主催による Sommeruni (夏期大学) のドイツ語コースである。IIK Bayreuth は、本学の研究教育協力協定校であるバイロイト大学のドイツ語教育、社会学、並びに経済学分野の代表者が1990年に設立した研究所で、バイロイト大学の関連学部との密接な協力関係のもとに、主として国際的な教育、研究活動に当たっている機関である。

バイロイト大学言語文学学部のドイツ語教育分野は、異文化理解と地域研究を組み入れた外国語教育の研究推進に特色があり、本研修コースでも主として午前中に行われるドイツ語そのものの授業のほか、午後や週末にはバイロイト市内外の諸施設や歴史的遺産の見学、また市民の日常生活に接するプログラムが豊富に組まれており、参加した本学生にとっては、ドイツを、またひいては異文化を体験する絶好の機会になったことと思う。

海外の大学への留学は、スチューデント・コモンズ等、筑波大学内の施設の整備が進んでいるために、今後も盛んになることが期待されるが、とりわけヨーロッパの大学との交流のためには、EU 共通の言語能力基準 (CEFR) に即した授業態勢の確立、ボローニャ・システムと本学のカリキュラムの整合性の確保など、制度面での梃子入れが必要な時期にきているように思う。今年度発足した CEGLOC がこの領域で指導的な役割を担う必要があろう。

(文責：武井 隆道)

平成27年度湖南大学中国語夏季短期研修実施報告

平成27年度の湖南大学中国語夏季短期研修は下記の日程で実施された。

参加者は2名（人文学類と情報科学類）で、当初予定の最低催行人数（5名）に達しなかったが、湖南大学担当者との協議の末、日程に一部変更を加えた上で実施されることとなった。参加学生によれば、約3週間の研修中は大きなトラブルもなく、安全に勉学に励むことができたとのことであった。

8月21日(金)	飛行機 成田(CA182)－北京乗継(CA1349)－長沙
8月22日(土)	10:00 開講式(外国語学院) 11:30 記念写真(岳麓書院) 12:00 歓迎パーティー 14:00 岳麓書院見学 20:30 湘江で花火鑑賞
8月23日(日)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化
8月24日(月)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化
8月25日(火)	長沙市内見学
8月26日(水)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化
8月27日(木)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化
8月28日(金)	岳陽楼見学
8月29日(土)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化
8月30日(日)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化
8月31日(月)	ホームビジット
9月1日(火)	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化
9月2日(水)	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化
9月3日(木)	①～③基礎中国語／午後 総合復習
9月4日(金)	午前 09:00-11:00 試験 午後 12:00 歓送パーティー 午後 汽車で北京へ出発。
9月5日(土)	午前 北京着
9月6日(日)	北京研修：故宮博物院・天壇公園
9月7日(月)	飛行機 北京発(CA421)・成田着

(文責：池田 晋)

海外語学研修（英語 A）実施報告

昨年度に続き英国オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける英語研修が2015年8月30日から9月19日までの3週間に渡り実施された。参加者全員が日本学生支援機構（JASSO）か、つくばスカラシップ（筑波大学）の奨学金を受給することができたが、円安の影響で総研修費用は高騰しており、それが参加者数に影響したことは否めない。募集説明会では60余名の参加があったものの、研修参加者は12名（学類10名、大学院2名）であった。

授業は基本的に2部構成で、午前中は様々な活動を通した英語の語彙、文法、機能表現などの実践的学習、午後はオックスフォードの建築や英国の祭りなど、文化や社会の特定のテーマに関する学習が中心であった。研修の最終日には、2、3名がチームになって協同でプレゼンテーションを行い研修の成果を披露した。授業の成績とプレゼンテーションの評価を合わせた総合成績により、合格者にはハートフォード・カレッジから研修の修了証書が授与された。参加者全員が無事合格し、昨年度同様、一様に高評価を得たことは大変喜ばしい。その後筑波大学では、ハートフォードの総合成績に加え、期間中毎週末に課した学習ポートフォリオ、さらに研修修了後に提出された英文レポートの成績をまとめて成績評価を行い、合格者に2単位（自由科目）を付与した。

本プログラムでは、参加者はカレッジの学生寮（個室）を利用することになっており、今回は画趣に富むThames河畔のFolly BridgeとChrist Church Meadowにほど近いWarnock Houseに滞在した。ハートフォードの在学生2名が学寮アドバイザー（Residential Advisor）として参加学生に付き、寮滞在時のみならず、自由時間、視察研修、週末など、生活と勉学の両面で細やかな世話をしてくれたので、学生も安心して過ごすことができたと思われる。課外活動では、ボードリアン図書館、アシュモリアン博物館等の施設を訪問し、視察研修では、ロンドン（大英博物館、ナショナルギャラリーなど）やコッツウォルズ等を訪れた。

研修の主な目的は、(1)教室の内外で英語の知識や技能をフル活用し、英語使用について自信をつけること、(2)英国での生活体験を通して多様な文化、社会、価値観などに対する理解や関心を深め、異文化対応力を身につけること、(3)協同でプレゼンテーションの課題に取り組みながら、将来地球規模の問題にも対処できるようなチームワーク力を鍛えること、の3点であったが、参加者の感想からは充実した研修であったことが伺え、以上の目的は達成されたと言える。

（文責：久保田 章）



ハートフォード・カレッジ
「ため息の橋」で

平成27年度ロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学 夏季ロシア語研修について

2015年9月1日から9月23日までの3週間強、本学の協定大学であるロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学の協力・支援の下、同大学文学部付属ロシア言語文化カレッジにおいて夏季ロシア語研修（自由科目「ロシア語」2単位として開講）を実施し、本学から6名（大学院生1名、比較文化学類3名、日本語・日本文化学類1名、工学システム学類1名）が研修に参加した。この夏季ロシア語研修は CEGLOC 開講の授業としての認定を受けているため、45時間の授業時間を確保して研修期間が決められるが、今年度は、大学の世界展開力強化事業と連動し、引率教員が同行し、週末や放課後などを利用したさまざまな研修が組まれた点が特記される。展開力プログラム二期生が2名参加して研修を受けた（プログラム生以外も同日程）。

当該研修は、平成27年度つくばスカラシップ短期海外研修支援奨学金に採択され、参加者は6万円強の奨学金の支給を受けることができた。この補助なしには参加が困難だったと参加者が語っていた。研修の機会を与えていただき感謝している。

参加者全員が、サンクトペテルブルグ国立大学の斡旋によりロシア人家庭でホームステイし、生きたロシア語とロシア人の実生活を体験した。英語は使わない、と、ロシア語だけのコミュニケーションをとった家庭が多く、まだロシア語学習を開始して半年に満たない1年生をふくめ、ホストファミリーと毎日会話して意思を疎通するために猛勉強し、メモしておいた質問をして引率教員と補習するといったこともあった。

到着翌日に大学でプレイスメントテストを受け、自分のレベルにあったクラスに入り、文法、会話、発音、読解の各科目についてレベル別の小グループで授業を受けた。4年生の2名とプログラム生である2年生2名、そして今年度からロシア語を履修している2名と、そのロシア語歴はさまざまであったが、いずれも適正な授業を受けてロシア語力を大きく伸ばすことができた。申し出ればすぐに他のクラスに代えてくれるので、初回の授業の後調整し、さらに再調整を行った。

授業外に組んで実施した研修には次のものがあった。

1. 在サンクトペテルブルグ日本総領事館表敬および山村総領事による特別講義。

研修参加者は正装を用意し、また、事前にロシア・サンクトペテルブルグ事情について調べて準備してきた。総領事より日露関係、ロシアの政治・経済の現状、求められる人材等についての特別講義を受け、質疑に丁寧にお答えいただいた。

2. 日本センター訪問および松原センター長による特別講義。

スライド等も利用しての特別講義をしていただき、そのあとディスカッションを行った。

3. 日本センター付属日本語教室視察、学習者との交流会。

教師は筑波大学出身の大平玲子先生で、生徒は日系企業に勤務するロシア人が多数を占める日本語教室を授業参観後、小グループに分かれて学習者たちと交流した。ロシア語と日本語の楽しさ難しさなどをお互いに語り合い、また、アニメ事情やロシアの若者の暮らしなど、興味深い話題が多かった。ここで仲良くなったため、市内に開店したばかりのラーメン屋（筑波大学卒業生がサンクトペテルブルグ大学元教員と共同経営）と一緒に食事に行った。その後も週末など、ロシア人たちが市内や郊外を案内してくれたりしたらしい。

4. ノヴォデーヴィチ女子修道院聖堂修復現場見学。

ソ連時代に閉鎖され、近年修復されている数多くの教会の一つで、明治初期日本から山下りん（笠間出身でロシア正教会からロシア留学に派遣された日本初の聖像画家）が籍を置き修道していた歴史ある修道院の中の聖堂が修復中。聖像画家ダネーヴィチ・セルゲイ氏に修復現場を案内していただき、正教について、イコンについて、修復についてお話をうかがった。宗教やイコンの修復の詳細などに熱心な質問が出て、セルゲイ氏を驚かせた。

5. ワガノワ名称バレエアカデミー訪問、バレエ博物館見学、授業参観、インタビュー。

帝政期から続く名門バレエアカデミーが筑波大学からの公式訪問として受け入れてくれ実現。バレエ博物館で学芸員の解説・講義を聴いたのち、実際に高校生相当、大学生相当の生徒がレッスンを受けている実技を見学した。日本から留学している19歳のおふたりにお話を聴いた。日本と全く異なるシステムで初等から大学院まで総合的に教育が行われており、プログラム生の一人が卒業研究でそのカリキュラムを追究したいと現在決めている。

6. そのほか、フィルハーモニーのコンサート、郊外ペテルゴフ日帰り旅行、夜間のバスツアー（町中の跳ね橋があがる時間）、文学散歩、など、授業とくらしに慣れるにしたがって各自が自分たちで企画し申し込みをして、全日程を有意義に精力的に過ごしていた。

帰国後、10月29日にキルギスでの夏季語学研修受講生と合同で海外研修報告会を行



現地学生との交流

い、生活、交通機関、授業、などにつき分担して準備した報告を行った。これまで抱いていたロシアについてのイメージと、実際にロシア語、英語で自分の目で見耳で聞いて知ったロシアとの違いを実感したことを、生き生きと具体的に語っており、参加学生たちが今後のロシア語学習への強い動機を得たことがうかがえた。

（文責：加藤 百合・監修：白山 利信）

2015年度キルギス夏期ロシア語研修について

中央アジアの山岳国家キルギス共和国の首都ビシュケクにおいて平成26年9月にはじめて実施したロシア語・キルギス語研修を、平成27年度は筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（以下「CEGLOC」）単位認定科目「海外語学研修ロシア語B」（3単位）として実施した。

キルギス共和国は、キルギス語とロシア語が公用語であり、比較的治安もよく、親日的な人が大多数の国である。しかも、3ヵ月以内であれば、日本人はビザの取得も不要であり、利便性の点でもメリットが大きい。

当該研修は、ロシア語及びキルギス語の基礎的な運用能力を身につけるとともに、キルギス共和国での実践的な経験を通じてロシア語圏の文化や社会に対する理解をより一層深める目的で行われた。第1回目の平成26年度は単位認定されなかったが、2回目の平成27年度より単位認定科目となった。

研修が実施された期間は、平成27年9月1日から9月24日までの約1ヵ月間である。研修はJICAキルギス共和国日本人材開発センター（以下「KRJC」）とCEGLOCが共催として実施された。KRJCは、本学の学術交流協定大学であるキルギス民族大学構内にある、国内最大の日本文化発信の拠点である。

本学の参加学生は8名で、内訳は院生1名（人社研国際日本）、学群学生7名（人文4名、国総1名、理工2名）である。今回は、関西大学（小田桐奈美助教）のロシア語教員にも学生の参加協力を特別に依頼し、2大学合同の研修となった。関西大学からは2名の学部生（いずれも商学部）が参加した。

参加学生は、ビシュケク到着後、キルギス共和国日本人材開発センターでクラス分けテストを実施し、習熟度別に授業を受講することとなった。ロシア語の授業は10日間で45時間、キルギス語の授業も2日間で9時間、研修期間で54時間受講した。授業はすべてロシア語で行われた。受講期間の終わりには試験（プレゼンテーションを含む）を行い、修了書が与えられた。

ロシア語とキルギス語の授業のほか、KRJCによる異文化理解講座（約4時間）、在キルギス日本国大使館における安全ブリーフィング、JICA事務所副所長によるキルギス事情講義などを受けた。またイシククリ州へのフィールドトリップも実施し、JICAによる一村一品プロジェクト（OVOP）の見学およびプロジェクトリーダーによる特別講義を聞いた。一村一品プロジェクトは、一つの村に一つの名産品を作り、地域の経済を活性化しようとする試みである。イシククリ州では特に女性の自立を大きな目的とし、フェルト製品や蜂蜜などのブランド「イシククリ・ブランド」を展開し、収益も軌道に乗ってきたところである。参加学生は、このような国際協力の現場を直に見ることができたのである。

研修後半の約一週間は、キルギス人家庭でのホームステイを行った。研修前半は参

加学生全員が同じホテルに宿泊していたが、ホームステイでは一人でキルギス人家庭において過ごした。キルギス人家庭では基本的にロシア語とキルギス語のみしか使われないため、参加学生のロシア語・キルギス語の運用能力は自然と向上することになった。また、ホームステイ中には「キルギスの家族は時にキルギス語で、時にロシア語で会話している」こと（いわゆるコードスイッチング）に気づき、「キルギスにおけるロシア語の使用状況について肌で感じることができた」と、多言語社会であるキルギス特有の現象を体感することもできた。

キルギス共和国日本人材開発センターのご好意とご尽力により、研修費用も非常に安く抑えられ、渡航費、宿泊費等込みで30万円かからない値段で収まった。

また、当該ロシア語研修は、平成27年度つくばスカラシップ短期海外研修支援奨学金に採択され、参加学生8名全員が奨学金の支給を受けた。また、大学の世界展開力強化事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」の一環として行った研修でもあり、同事業補助金により研修費用の一部および引率教員の派遣経費を支出した。

尚、本研修の成果は第3回グローバル人材育成教育学会全国大会において発表された（発表題目：「多言語社会の理解に向けた教育実践-キルギス共和国における短期研修を参考に-」，報告者：松下聖）。

（文責：白山 利信・松下 聖）



キルギス語の授業の様子